

## 提婆達多品における女人成仏について (2)

——大宝積經を中心とする変成男子——

望 月 海 淑

前号において、女人成仏を説いたとなされる提婆達多品の表現をみて来たが、ここでは女身を男身に変える変成男子の表現がなされておった。変成男子は女身を劣視する立場から始まるというのであるが、同時にそのまゝでは女人の成仏とは云い得ないであろう。変成男子をもって、八才の童女が成仏したといえるならば、その背景にはどのような思想が存するのであろうか。この辺に焦点をしばって、阿含からの仏典における女人觀を視て来たのであるが、今号は前に続いている立場において、大宝積經を中心にして考察した女人成仏觀を執り上げてみようと考えて、それがどのような結果を招来するかに興味あろうと信ずるからである。従って、今号では提婆達多品との直接の交渉は執り上げ得ない。

### 5

釈尊の滅後の結集において、摩訶波闍波提の出家發願をゆるさるべく阿難が釈尊にたいし論難し、彼女等を僧團の中に加えさせたことについて、これは重大な過失であるとして阿難が迦葉等の仏弟子に論難せられておるが、このよ

うな立場からは女人成仏思想は發生しにくいといわなければならぬ。即ち、このような状態の中において、女人成仏を明白に打ち出すためには重大な信念が必要であろう。大乘の諸仏典において變成男子の型態をとることで女人成仏の問題にとりくんだものは、このような律藏の強い立場に原因があるものか、或はインド全域に存した女人に対する考え方が強く影響を及ぼしているものかは疑問である。これらに対し、大乘仏典にても女人成仏は明白に打ち出されてはおらず、むしろ、女人は劣性のものであるとする態度を保持しているものをも認めなければならぬであらう。

般若経はその河天品第五十九で

仏告阿難。是恒伽提婆姉。未來世中當作仏。劫名星宿。仏号金華阿難。是女人畢。是女身受男子形。当生阿閼仏阿鞞羅提國土。於彼淨修梵行。

と述べている。これは仏が恒伽提婆姉の功德の因縁を知り微笑したのにたいし、阿難が何故に微笑したのかと疑したものについての仏の解答の中で語られたものである。この女身を畢り男子の形を受く、の文は注意を引く。女身をおわるとは、女身なるものには一定の生命なり、なすべき仕事なりが存し、そのような義務を果しおわることを意味するものか。或は男身は女身よりも一段上に存するとなす意識があるのであらう。このような点については、大樹緊那羅王所問経は更に明白に女人についての態度を表明している。即ち、空・無相・無願を説いて般若波羅密を高唱し衆生濟度を主張したこの経は、方便波羅密の一として大樹緊那羅王の諸夫人等の成仏を述べているが、その中で王の諸夫人等が

世尊。我等皆發無上道心。終不以是女人之身成阿耨多羅三藐三菩提。普哉世尊。願為我等如応説法。令我等輩轉

捨女身得男子身。疾成無上正真之道。

と語るにたいして世尊は

爾時世尊。語緊那羅王諸夫人等。諸姉諦聽善思念之。吾当演說転捨女身成男子身。疾無上正真之道。

と語り、ついで

仏言。諸姉。女人成就於一法行。捨女人形得男子身。疾得無上正真之道。

と女身を変じて男子となるための十法行を展開している。十法行については、棲神三十六号所載の「女人成仏」④に詳細であるが、その十法行の中に、法を愛し法を樂み法を欲し法を聴き、法を聞き已りて正念觀察して女身を穢厭し常に喜んで男子の身を成ずるを得んと欲す、とする箇所と、他の男子の人を思念せず、というのがあつた。即ち、女人に對して、成仏するためには女である自分自身の身分を穢厭することと、男性のことを考えてはならないことを示したものであろう。この引列の後者はとも角、前者には女性に對する蔑視がみられる。成仏するには女身を転捨しなければならず、そのためには自分自身の肉体を嫌悪しなければならない、となす説示には女性の人格そのものを認められたものであると即断出来かねるものが存する。やはりこの経典の底流には男身に對する女身、更には男身に從属するものとしての女身としての考え方があり、女身の劣性に立場を發したものといい得よう。十法行の修行の果に於て、女身を転捨し、始めて男身となり成仏し得るとする説示は、女人の即身成仏とは異質のものであるといわなければならぬ。この大樹緊那羅王所問経は支婁迦讖訳出がAD一四七―一八六年と伝えられ、菩薩は空性にして虚空を道場となす、六度を正道となし下乗を非道となすとする点や、小乗の代表的人物迦葉の無力無能を示し大樹緊那羅王を賞讃する点等からみて、大乘を宣揚した般若系の経典であり、しかもかなり早期の作成になるものかと思われる。小乗の

女人不成仏に對し立ち上った女人成仏の壯圖の割には、般若思想の完全なる運用が行なわれなかつたきらいが存するといわなければならない。

曇摩蜜多訳出の転女身経は無垢光女の変成男子して菩薩となつた物語を展開している。無垢光女は婆羅門須達多と妻淨日の子女であるが、仏が耆闍崛山で説法中、淨日は懷妊しており胎中の女兒が一心に合掌して仏の説法を聞いておるのを天眼方一の阿泥盧豆が見て仏に告げる。仏の問に對し胎女は悟りを得んがためであると語る。東南方の方角、三十六那由佉の仏土を過ぎ淨住と名づくる淨土があり、仏は無垢称王如来と称すと、舍利弗に語り、

当此女著衣服瓔珞之時。放天光明普照大衆。是故此女名無垢光。

と、その名を明らかにし四法に就ての説を語り、こゝに舍利仏と無垢光女との對論がおこり、舍利仏は論破される。そして

世尊。今此会中諸比丘比丘尼。優婆塞優婆夷願樂欲聞。修何善行。得離女身速成男子。能發無上菩提之心。唯願世尊為解說。

の彼女の願をいれて仏は離女身、速成男子のための十法を語り、無垢光女は

爾時無垢光女。前礼仏足而作是言。一切諸法無男無女。此言若実。令我女身化成男子。發此言時。

三千大千世界六種震動。無垢光女形即滅。變化成就相好莊嚴男子之身。

と、男子としての身となり菩薩となつたことを示している。

この転女身経に見られるものは、女身を離れ男身となる変成男子思想であるが、変成男子するためには十法を行じなければならぬことを示す。十法を略記すると

1 深心求<sub>レ</sub>於菩提<sub>一</sub>。

2 除<sub>レ</sub>其慢心<sub>一</sub>。離<sub>レ</sub>於欺誑<sub>一</sub>。不<sub>レ</sub>作<sub>レ</sub>幻惑<sub>一</sub>。

3 一身業清淨持<sub>二</sub>身三戒<sub>一</sub>。二口業清淨離<sub>二</sub>口四過<sub>一</sub>。三意業清淨離<sub>二</sub>於瞋恚邪見愚癡<sub>一</sub>。

4 一不<sub>レ</sub>悲害<sub>一</sub>。二不<sub>レ</sub>瞋恨<sub>一</sub>。三不<sub>レ</sub>隨<sub>レ</sub>煩惱<sub>一</sub>。四住<sub>レ</sub>忍辱力<sub>一</sub>。

5 一樂求<sub>レ</sub>善法<sub>一</sub>。二尊<sub>レ</sub>重正法<sub>一</sub>。三以<sub>レ</sub>正法<sub>二</sub>而自娛樂<sub>一</sub>。四於<sub>レ</sub>說法者<sub>二</sub>敬<sub>レ</sub>如<sub>二</sub>師長<sub>一</sub>。五如<sub>レ</sub>說修行<sub>一</sub>。

6 一常念<sub>レ</sub>仏願<sub>レ</sub>成<sub>二</sub>仏身<sub>一</sub>。二常念<sub>レ</sub>法欲<sub>レ</sub>轉法輪<sub>一</sub>。三常念<sub>レ</sub>僧欲<sub>レ</sub>覆<sub>二</sub>護僧<sub>一</sub>。四常念<sub>レ</sub>戒欲<sub>レ</sub>滿<sub>二</sub>諸願<sub>一</sub>。五常念<sub>レ</sub>施欲<sub>一</sub>

拾<sub>二</sub>一切諸煩惱垢<sub>一</sub>。六常念<sub>レ</sub>天欲<sub>レ</sub>滿<sub>二</sub>天中之天一切種智<sub>一</sub>。

7 一於<sub>レ</sub>仏得<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>壞信<sub>一</sub>。二於<sub>レ</sub>法得<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>壞信<sub>一</sub>。三於<sub>レ</sub>僧得<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>壞信<sub>一</sub>。四不<sub>レ</sub>事<sub>二</sub>余天<sub>一</sub>。惟奉<sub>二</sub>敬<sub>レ</sub>仏<sub>一</sub>。五不<sub>レ</sub>積<sub>二</sub>聚慳惜<sub>一</sub>。隨<sub>レ</sub>

言能行<sub>一</sub>。六出<sub>レ</sub>言無<sub>レ</sub>過恒常質直<sub>一</sub>。七威儀具足<sub>一</sub>。

8 一不<sub>レ</sub>偏<sub>二</sub>愛已男<sub>一</sub>。二不<sub>レ</sub>偏<sub>二</sub>愛已女<sub>一</sub>。三不<sub>レ</sub>偏<sub>二</sub>愛已夫<sub>一</sub>。四不<sub>レ</sub>專<sub>二</sub>念衣服瓔珞<sub>一</sub>。五不<sub>レ</sub>貪<sub>二</sub>著華飾塗香<sub>一</sub>。六不<sub>レ</sub>為

二美食因緣<sub>一</sub>。七不<sub>レ</sub>恪<sub>二</sub>所施之物<sub>一</sub>。八所行清淨常懷<sub>二</sub>慚愧<sub>一</sub>。

9 息九惱法。憎我所愛。已憎今憎當憎。愛我所憎。已愛今愛當愛。於我已憎今憎當憎。

10 一不<sub>レ</sub>自大<sub>一</sub>。二除<sub>レ</sub>憍慢<sub>一</sub>。三敬<sub>レ</sub>尊長<sub>一</sub>。四所言必爽<sub>一</sub>。五無<sub>レ</sub>嫌恨<sub>一</sub>。六不<sub>レ</sub>麁言<sub>一</sub>。七不<sub>レ</sub>難教<sub>一</sub>。八不<sub>レ</sub>貪惜<sub>一</sub>。九不<sub>レ</sub>

暴惡<sub>一</sub>。十不<sub>レ</sub>調戲<sub>一</sub>。

であるが、その内容は大樹緊那羅王所問經の十法行と大層以ている。これを支えるものは求菩提心であるが、転女身經の十行には直接に女人を劣視する言葉はみられない。恐らくこれは無垢光女の言葉、一切諸法無男無女思想に拠り処があるにちがいない。一切諸法無男無女であるならば、变成男子はさしたる重大事とはなり得ない。女身を穢厭し常に喜んで男子の身を成せんとする前經の誓願が男女隔別の観点にあるにたいし、無男無女の立場は差別を越えた

絶待の立場を意味し積極的な女人成仏への前進を示したものであるといえよう。そして、この立場は維摩経の立場に通ずるものであろう。

闍那崛多訳出の月上女経<sup>⑩</sup>は月上女についての物語である。仏が毘耶離大樹林中草茅精舎に在る時に、父毘摩羅詰と母無垢との間に一女が生れた。姿容端正にして身体円具し、生れる時大光明あり月に優り、家内を照らして処々に充滿せる故に月上と名付けた。月上は生れる際に啼哭せず合掌して偈を語り、瞬時にして八才の大きさになった。大衆は心に熱惱を懷き遍く身体に満ち、月上を妻となさんと願うが、月上の偈を聞き諸欲を厭離する。そして舍利仏の言説を大乘の見地より論難し仏所に詣ずる。仏所で月上女は文珠支利・不空見・持地・弁聚・無礙解・虚空藏・不損他心・喜王・堅意・弥勒の各菩薩と語り彼女が十誓願を示すに際し、世尊が微笑するのを見た長老阿難が偈をもってその因縁を問ひ、世尊が偈をもってこれに答えるを聞き彼女は、

從レ仏對レ聞レ身已授記。聞已歡喜踊躍無量飛騰虚空。……其女於即轉ニ彼女身變為ニ男子<sup>⑪</sup>。  
となり仏を喚じて偈を説いたが、その偈中に、

如レ是諸法本性者 喻如ニ虚空無レ有レ異  
我先所有女人身 彼身空体亦無レ実  
即無ニ実体是為レ空 空体無レ物無レ可レ取  
彼身顛倒分別生 分別猶如ニ鳥飛レ空  
意欲レ成ニ就レ仏菩提 復欲レ降レ伏四魔衆  
復欲ニ三千大千界 轉ニ於微妙大法輪

汝等猛發菩提意、尊重供養婆伽婆<sup>⑫</sup>。

とある。月上が女であつたその女身は空体にして無実なるが故に、悟りを求め仏を供養せんと心から念願する時は速に男身に身を転じ成仏出来ることを述べ、且つ、全てのの人々にこのことの可能なるを示したものであるが、これは、仏の偈中の

童女男女婦人等 教化令入仏乗中

二万三千諸人類 成熟無量菩提道

其女転此女人身 不久出家在我法<sup>⑬</sup>

に答えた月上菩薩の仏法に対する信念といひるのである。そして、この信念、成仏は同時に月上の十誓願に支えられるものであらう。即ち十誓願は<sup>⑭</sup>

世尊。願我藉此善根因緣力故。於未來世若諸衆生

- ① 住我相者。為説其法令除我相。
- ② 住我見者。為説其法得除我見。
- ③ 住於一切分別相者。我為説法除其分別。及除貪欲瞋恚癡等。
- ④ 住四顛倒。我為説法令除四倒。
- ⑤ 五蓋覆者。為説其法令除五蓋。
- ⑥ 著六入者。我為説法令離彼著。

⑦ 著三七識。我為説法令其除斷。

⑧ 著二八顛倒。為説其法令悉除滅。

⑨ 住九使者。我為説法令除九使。

⑩ 具足十力。如今世尊放光明照十方刹等無有異。

であり、仏を求めるものなすべき行いであろう。この誓願は無垢光女の十行に較べ、更に積極的に、仏者のあるべき立場を明示したものといい得よう。換言すれば大乘の持つ精神を具現せんとしているものといいうる。そして、この経の立場も亦、維摩経と似通い、転女身経の表現と類似して、我先所有女人身 彼身空体亦無実 即無実体是為空と表現している。男女も亦一切皆空の理に於てあるものであり、その点で無男無女は勿論実体なきものといわなければならない。しかし、この二経共に、このような立場を執りながらも、何故変成男子と表現しなければならなかったのか。維摩経と較べてみた時、未完成のおもむきがあるといわなければならない。しかし、これは注意を要する点であろう。

- ① 大正二十二、P 191 b
- ② 大正八・P 349 C
- ③ // 十五・P 367 b } 389 a
- ④ 棲神三十六号・P 72 } 73 女人成仏
- ⑤ 大正十四・P 915 b } 921 C
- ⑥ " " "
- ⑦ " " "
- ⑧ " " "

⑩ 大正十四年  
 大正十四・P15b } 921C  
 ⑪ " "  
 ⑫ " "  
 ⑬ " "  
 ⑭ " "

6

大宝積経はその名の通り、別行されていた経典を積集したものであるが、そのような性格によるためだろうが、女人成仏についての物語の幾つかを見ることが出来る。しかし、それらはすべて独立した経典の積集であるために、女人に対する態度は種々なものであり、その間の関連性はみとめられない。仮にそれらの幾つかを執り上げてみたい。そして、それらの順序は大宝積経の各会配列のそれに従うことにする。

三律儀会は耆闍崛山における説法であるが、摩訶迦葉の、

若諸衆生。求<sub>下</sub>於<sub>レ</sub>仏法<sub>ニ</sub>力無畏<sub>上</sub>者。捉<sub>レ</sub>受何法<sub>ニ</sub>而修<sub>レ</sub>行<sub>ニ</sub>之。捉<sub>レ</sub>受何法<sub>ニ</sub>増<sub>上</sub>長<sub>下</sub>成<sub>下</sub>熟<sub>上</sub>諸如来道<sub>上</sub>。捉<sub>レ</sub>受何法<sub>ニ</sub>取<sub>レ</sub>諸功德増長<sub>一</sub>。証<sub>レ</sub>入阿耨多羅三藐三菩薩提<sub>一</sub>。得<sub>レ</sub>不退転<sub>一</sub>①。

の質問に対する釈尊の解答の中の一つに菩薩の行は我所を離れるが故に、

若有<sub>レ</sub>衆生不<sub>レ</sub>聞<sub>レ</sub>此法<sub>一</sub>。而説<sub>レ</sub>菩提及菩薩行<sub>一</sub>。則為<sub>レ</sub>非行<sub>一</sub>。言<sub>レ</sub>菩薩行者。実無<sub>レ</sub>所行<sub>一</sub>是菩薩行。

とあり、かつ所行なく円満なる行の菩薩の注意しなければならないこととして、淨戒を具足護持して心に眞高せず云々と、菩薩の親近処を展開している。②その中には、比丘尼を犯さず、婬女・寡婦・処女の家に往かず、他妻に近か

ず、ともあり更に、二十処あつてまさに遠離すべし、となし二十処を挙げてゐるが、このうちの半数以上は女人・比丘尼に親近すべからざるを述べたものである。この経典が女人に対して扱った神経のほどがうかがえて法華経安樂行品に極めて類似した親近処と称しうるが、在家菩薩應レ成三法<sup>一</sup>。の言葉からして安樂行品よりは異なるものであろう。しかし、このような三律儀会の態度は

復次迦葉。有三種法<sup>一</sup>終<sup>レ</sup>應<sup>レ</sup>作。若有<sup>レ</sup>作者則受<sup>レ</sup>女身<sup>一</sup>。何等為<sup>レ</sup>三。不<sup>レ</sup>應<sup>レ</sup>障<sup>レ</sup>母聽<sup>レ</sup>聞正法<sup>一</sup>及見<sup>レ</sup>比丘<sup>一</sup>。不<sup>レ</sup>應<sup>レ</sup>障<sup>レ</sup>妻見<sup>レ</sup>諸比丘<sup>一</sup>及聞<sup>レ</sup>正法<sup>一</sup>。乃至不<sup>レ</sup>應<sup>レ</sup>於<sup>レ</sup>己妻所<sup>一</sup>犯<sup>レ</sup>其非路<sup>一</sup>。如是三法終不<sup>レ</sup>應<sup>レ</sup>作。若有<sup>レ</sup>作者便受<sup>レ</sup>女身<sup>一</sup>。③  
にいたり、正法に適わない時は女身となると、これをいましめている。この事は女身となるのは悪業の故でありとして、女身を嫌悪し劣視する思想に基盤をおくものであることを示すであろう。即ち極めて強い女人劣視の態度をここでは認めなければならぬ。そして、この語が迦葉にたいして語られていることを知らなければならぬ。

妙慧童女会は菩提流志訳出で、別名須摩提経であり、この他竺法護訳出須摩提経、鳩摩羅什訳出の須摩提菩薩経がある。

この経典も耆闍崛山に於ける説法を扱ったもので、一二五〇人の比丘と一万人の菩薩が俱におった。そして王舎城に長者優迦の生年八才になる娘の須摩提(妙慧)がおり、彼女に関する物語である。この妙慧が菩薩の有せる属性の十項は如何にすれば得られるかを仏に質問する。  
十項は大略次の如きものである。

1 端正の身を得

2 富貴の身を得

3 眷属壊れず

4 仏前で化生をうけ蓮華の座におる

5 一仏土より一仏土に到る

6 世に処して怨なし

7 諸人信受

8 法障を除く

9 魔業を離る

10 命終にのぞむ時、諸仏現前す

仏がこれにたいして、四法を十項目の各一項づつにあてて、都合四十行（四十事）をもって説明されたのについて、妙慧はこの四十行を完全に奉行することを誓言する。そして大目犍連が菩薩行は行ずること難きをもって、これを非難するが、妙慧は真実不慮の弘願であることを示した後に、目犍連に次の如く語る。

以<sub>レ</sub>我如是真実言<sub>レ</sub>故。於<sub>レ</sub>未来世<sub>一</sub>当<sub>レ</sub>得<sub>レ</sub>成<sub>レ</sub>仏<sub>一</sub>。亦如<sub>レ</sub>今日<sub>一</sub>釈迦如来<sub>一</sub>。於<sub>レ</sub>我<sub>レ</sub>國中<sub>一</sub>無<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>魔事<sub>一</sub>及以<sub>レ</sub>惡趣女人之名<sub>一</sub>。⑤  
即ち、女人の名が魔事・惡趣と並んでいることは、当時の仏教において如何に女人が嫌惡されておったかを証するものであろう。そして、妙慧の囀に於ては釈迦如来の囀に女人の名がないようにこれをなくそう、というのであるが、それはどのようなことを示すのであろうか。この経は、それを

於<sub>レ</sub>法界中<sub>一</sub>無<sub>レ</sub>所住<sub>一</sub>故。⑥

となし、更に菩提とは法を分別するなきをいい、一切諸法を虚空の相に等しくするのが菩薩であると語っている。こ

には大乘仏教の精神によって、女人ととり組んでいる姿をみうる。更に文殊支利の次の如き質問とそれにたいしての妙慧の答は。

又問妙慧。汝今猶不<sub>レ</sub>転<sub>ニ</sub>女身<sub>一</sub>耶。妙慧答言。女人之相了不可得。今何所<sub>レ</sub>転。……無<sub>レ</sub>有<sub>ニ</sub>魔事及諸惡趣<sub>一</sub>。亦復無<sub>レ</sub>有<sub>ニ</sub>女人之名<sub>一</sub>。

であるが、この女人之相ついに不可得に對して、什訳法護訳は法は無男無女なる故に無所得であるとなしている。即ち、絶対なる女人相なるものは一切皆空なる故に存在し得ない。女人相がつかまえて得ないものである以上それを転ずるとは如何なることであるのか、大乘の法に於ては無男無女でなければならぬ、と主張する妙慧の高唱を認めなければならぬ。そして、この妙慧は如是き語につづいて、女身を男身にかえることを告げてそれを現じている。

妙慧菩薩転女成男。如三十才知法比丘。

こゝにおいて、大乘の精神を馳使して文殊支利と對論した妙慧が變成男子を示したことを知りうる。無男無女を唱えながらも變成男子を説示するところは、転女身経の無垢光女、月上女経の月上女とに、須摩提経の妙慧は似通っており、且つ、前者が十法・十誓願に支えられるごとく、妙慧は四十行に支えられており、ともに声聞衆を論難するところ等、大層共通点を見出しうる。しかし、妙慧の年令が八才であり、文殊支利との對論をなし、経末において、受持・誦・誦・解説・書写の所謂五種法師を強調している事を見逃すわけにはいかない。これが果して提婆達多品に通いうるものであるか、どうか。

無畏徳菩薩会には別訳阿闍世王女阿術達菩薩経（法護訳）がある。耆闍崛山中の説法であり、無量の声聞衆が托鉢をなしながら阿闍世王の宮殿に至る。阿闍世王に無畏徳（阿術達）と名付ける娘があり、彼女は、光色第一にして年

十二才であつた。この無畏徳が托鉢の声聞衆を迎えず礼しないのを見て、父の阿闍世王は不審に思い彼女に理由をた  
だすと、彼女は轉輪聖王（遮迦越王）が小國の王のために起ち迎え礼をなすを聞いたことがあるかどうか等を父王に  
質し、父王の、聞いたことのないの返事を聞いて、大王は発心して阿耨多羅三藐三菩提心を求め、一切を度せんと欲し  
て、大慈悲を持つのに、この比丘らは大慈悲がない、王は日月の如く、声聞は螢火の如きである、等と語りその理由  
を説明した。従つてこれを聞いていた声聞衆と無畏徳の間に論難が展開されるが、彼女は大乘の精神によつて、舍利  
仏、大目犍連、摩訶迦葉、須菩提、羅睺羅の大声聞の人々を論破してしまふ。そして、無畏徳は阿闍世王と母と兄弟  
と後宮列女等と共に耆闍崛山に往き仏を礼し座した。舍利弗の質問に答えた仏は、彼女は過去九十億仏を供養するを  
もつて功徳をなしたものであるとあるが、更に次の如き對話を見うる。

舍利弗言。世尊。此女能轉<sub>ニ</sub>女身<sub>ニ</sub>不耶。仏言舍利弗。汝見<sub>ニ</sub>彼女<sub>一</sub>。豈是女耶。汝今不<sub>レ</sub>應<sub>レ</sub>作<sub>ニ</sub>如是見<sub>一</sub>。何以故。

以<sub>ニ</sub>是菩薩發願力<sub>一</sub>故。示<sub>ニ</sub>現女<sub>一</sub>為<sub>レ</sub>度<sub>ニ</sub>衆生<sub>一</sub>。

即ち、無畏徳を女人であるとみるのは過ちであり、その理由は、女身を示すのは願力をもつて衆生を救済せんとして  
いるからであるとなし、更に、このことを証明して、彼女の言は

若一切法非男非女。令<sub>ニ</sub>我今者現<sub>ニ</sub>丈夫身<sub>一</sub>。令<sub>ニ</sub>一切大衆悉皆<sub>レ</sub>親見<sub>一</sub>。

となされ、女身を滅し、丈夫身を現じたことを示している。

これに対して、法護訳は諸大衆見無愁憂身為男子不復見女人像の文でやはり變成男子を示していることを知りう  
る。即ち、大乘の精神に依れば男女隔別の区別はなく一切は空でなければならぬ、従つて無畏徳が女であるとなす  
のは物に執着する見方であり、無畏徳は方便をもつて女の姿を示しているにすぎない故に、辨言に依つては男の姿も

現することが出来るとなすものであろう。そこで、こゝに示される變成男子は、妙慧の説話と同じく男子となつたことを示すものであるが、それによって成仏したとなされるのではないことを知らなければならぬ。即ち、同経は仏の言として、過去九十億の仏において菩提の心を發したとなし、彼女が既に悟りを得ていたことを示しているが、悟りを得ているがために、

一切諸法皆如是。即時忽化<sup>ニ</sup>生相<sup>一</sup>。雖<sup>ニ</sup>諸分別所起之相<sup>一</sup>。無<sup>ニ</sup>諸顛倒<sup>一</sup>。大王。還即此時復現<sup>ニ</sup>女身<sup>一</sup>。王見不也。王言已見。而我非<sup>ヲ</sup>以<sup>ニ</sup>色身相<sup>一</sup>見<sup>ト</sup>。我今現見<sup>ニ</sup>比丘身<sup>一</sup>已。復見<sup>ニ</sup>女身<sup>一</sup>。<sup>⑫</sup>

と自在であり、自在であるのは空性においてあるからであり、そこには大乘の精神を發揚していることを知りうる。この無畏徳の物語で展開された女人觀は、声聞衆が女人劣視の觀を抱いているのに対して、大乘には女人劣視の思想のないことを明示している、というる。尚、既に悟りを得ていたとなす無畏徳が語る菩薩觀は八種の法行を成就するものであり、出家在家の区別はないことを示している。八種<sup>⑬</sup>を略記すると、

- 1、菩薩は身の清淨を得、菩提を信ずる。
- 2、大慈大悲を成就して衆生を捨てず。
- 3、大慈悲を成就せる故に、世間の諸事に善巧なり。
- 4、身の分を捨てて、方便善巧を成就するに及ぼす。
- 5、善巧に無量の發願をなす。
- 6、般若波羅蜜の行を成就し、一切の見を離るる。
- 7、勇猛精進して以て諸の善業を修めて厭足なし。

8、無障智を得て、以て無生法忍をうる。

であつて、衆生救済に力が注がれていることと般若系の經典であることとを知りうる。

無垢施菩薩応弁舎は拱道真訳であり、別に空法護訳の離垢施女経、般若流支訳得無垢女経がある。舎衛國祇樹給孤獨園における説法である。舍利弗等の八大声聞と文殊支利菩薩等の八大菩薩等が舎衛國での説法につき議論しながら城門にいたる。城内には波斯匿王の娘、年八才の無垢施があつた<sup>⑭</sup>。端正殊妙見者咸悦と表現される。時に城中におつた五百人の婆羅門は門外に諸の比丘のおるのを不吉となすが、無垢施はこれを説伏し悟りの心を発させて菩薩・声聞等と会い、舍利弗に語る。

我是女人。智慧微淺多諸煩惱。又多放逸樂卑下事。為不順思惟所牽。善哉大徳舍利弗。為憐愍我故。説微妙法<sup>⑮</sup>。無垢施は永遠なるものを求める悩みを舍利弗に語り、こゝにこの經典は始まる。八大声聞は彼女の質問にたいして仏法の真義に關するものである故に答えられないという。かくの如くして八大菩薩も彼女に満足が与えられないので、須菩提は

諸大徳。我等宜還。不須入舎衛城乞食。所以者何。無垢施女所説即是智者法食。我等今日樂於法食。不須轉食<sup>⑯</sup>。と語り、共に仏所に至る。即ち、彼等は彼女のために大乘を聞いたことを示している。このことは維摩経の弟子菩薩二品における維摩と十大弟子・五菩薩の論議と同様で大層に通っている。たゞし、維摩経においては須菩提の役割を果すのは文殊支利菩薩であるが、この両者の相違は維摩経の方が論脈をもっていることを示すであろう。無垢施女を法護が維摩羅達と訳した理由もこの辺にあるかもしれない。

以下、無垢施女の菩薩云何行云云の偈にたいする仏の説示が始まる。そして、菩薩には四法がありこれを成就しな

ければならない、と十八種類の四法を説く。彼女がこの七十二法を完全に行ずる誓をなすと大目連は

菩薩難行豈不知耶。終不<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>女身<sub>二</sub>而得<sub>中</sub>阿耨多羅三藐三菩提<sub>也</sub>。①

と、女人不成仏の立場でもって、女人の身体をもつてしては悟りを開くことは出来ない、と彼女に論難を加える。無垢施は目連に向つて、私の所言は至誠にして不虛であり、将来の世に如来を成じ悟りを得たならば三千大千世界は六反震動し、衆生を不退に住せしめ、

使<sub>レ</sub>我<sub>レ</sub>妾<sub>三</sub>此女身<sub>一</sub>。成<sub>中</sub>十六童子<sub>也</sub>。②

と語ると、即時に三千大千世界は六反震動し、音楽は自ら鳴り

無垢施女。即<sub>レ</sub>妾<sub>三</sub>女身<sub>一</sub>。成<sub>中</sub>十六童子<sub>一</sub>。③

と、彼女が變成男子したことを示している。これについて仏は一同に女の変成男子の姿をみたるか、と念を押し更らに、彼女は悟りを得て八万阿僧祇劫に行をなしており、彼女が菩薩行を行じて、その後文殊支利が菩薩の心を発したのであり、はるかに彼女の方が早いことを示している。目連は文殊支利より古い菩薩が未だ女人の姿をなしているのに疑を懐き

謂<sub>レ</sub>無垢施菩薩言。善男子。汝已久<sub>レ</sub>發<sub>中</sub>阿耨多羅三藐三菩提心<sub>一</sub>。何以不<sub>レ</sub>轉<sub>中</sub>女人身<sub>一</sub>。④

と語る。無垢施が菩薩であるならば、男でなければならないのに、何故に下劣な女人の姿をなしておるのかの問である。彼女のこれに対する答えは次の通りである。

世尊記大德。於神足人中最為第一。何為不<sub>レ</sub>轉<sub>中</sub>男子身<sub>一</sub>也。大德目連。即便默然。無垢施菩薩、謂大德目連言。亦不<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>女身<sub>一</sub>得<sub>中</sub>阿耨多羅三藐三菩提<sub>也</sub>。亦不<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>男身<sub>一</sub>得<sub>中</sub>阿耨多羅三藐三菩提<sub>也</sub>。所以者何。菩提無生。是以不<sub>レ</sub>何得<sub>也</sub>。⑤

神足第一の目連はどうして男の姿から女に姿を変えないのか、と声聞のもっている女人劣視の観をとりあげて批難し、成仏は男女の形によるものではないとしてこのような考え方である限り男女の姿の如何に関わらず悟りを得ることは出来ない、となしている。即ち、この経においては、女人劣視の思想をもつ声聞にたいして、大乘は一切平等の立場に立ち、そこには女人劣視の全くないことを高唱しているといえる。従ってこゝにみられる変成男子は、男女自在であるあり方を声聞に示すための方便として化現したにすぎないものであり、女人成仏にたいして極めて優れた考え方を表明したものであるといえる。

「註」

① 大正十一・P 4 a

② " " P 5 b } c

③ " " P 16 c

④ 菩提流志訳出には二経がある。一は大宝積経の妙慧童女会（須摩提経）AD 708-713 訳出で、二はAD 693 訳出の妙慧童女所問経である。

尚竺法護訳出仏説須摩提経は大正十二、P 76 b-78 c 所載

鳩摩羅什訳出仏説須摩提菩薩経は大正十二、P 78 c-81 c 所載

⑤ 大正十一、P 548 b

什訳仏説須摩提菩薩経は、是証明我之至誠。若未來有起菩薩意者亦当如是。我後亦当得多陀竭阿羅訶三耶三仏と語り法護訳須摩提菩薩経は是則証明我之至誠。若有未來起菩薩意者亦当如是。我後不久亦当如如来無所著等正覺。信如我言無有虛者。と語り三事が見られないが、この後段において、夫々三事のないことを語っている。

⑥ 大正十一、P 548 c

⑦ " " P 549 a

⑧ " " "

⑨ " " P 555 a

⑩ " " "

- ⑪ 大正十二、P 84 c
- ⑫ 大正十一、P 555 c
- ⑬ // P 554 b
- ⑭ 法護・般若流支訳は共に十二才
- ⑮ 大正十一・P 557 c
- ⑯ P 560 a
- ⑰ P 563 a
- ⑱ // P 563 a
- ⑲ // // P 563 a
- ⑳ // // c
- ㉑ // // c

法護訳は八才童子。般若流支訳は十六才。

7

大乘方便会は竺難提訳であり、別訳として竺法護訳の慧上菩薩問大菩薩經、施護訳の仏説大方廣普巧方便經とがある。今、難提訳によってみることにする。仏は舍衛國の祇樹給孤獨園におり、智勝菩薩が菩薩は方便を如何に行ずべきかを問ひ、仏がこれに答えを与えるところから始まる。即ち、菩薩の方便は如何にあるべきかが説かれ、菩薩と女人との関係も説示されておるが、やはり男に対する女として、この問題は見逃すわけにはいかない重要事であったろう。この女人についての説話を執り上げて行こうと思う。

最初は阿難の疑問である。即ち、

我今晨朝入<sub>ニ</sub>舍衛城<sub>ニ</sub>次第乞食。見<sub>テ</sub>衆尊王菩薩与<sub>ニ</sub>一女人<sub>ニ</sub>同一<sub>ニ</sub>床坐<sub>上</sub>。<sup>②</sup>

と、衆尊王菩薩が女人と共に同一の床におったことを過であると指適している。

仏は阿難にたいして、菩薩乘に住するものは一切智心を離れず、五欲をもって嬉戯し行じたとしても過失なきことを告げ、衆尊王菩薩と共にあった女人について次の如く語った。過去五百世前夫婦であったので彼女は衆尊王菩薩を見て愛著を生じたが、善根力をもってかの菩薩が私の家で一処に坐せば私に悟りの心を発せしめるのであらうと念じた。菩薩は彼女の所念を以て夜分に家に行き女人の手をとり一牀に坐して法門を説示する。それに依り彼女は悟りの心を発し

於此命終得<sub>レ</sub>轉<sub>ニ</sub>女身。当<sub>レ</sub>成<sub>ニ</sub>男子<sup>④</sup>。

と変成男子して成仏することを示している。この時の衆尊王菩薩の行爲は五欲を受けたものではあるが、悲心を成就したものであり、菩薩の方便行のあり方であるとなしているが、これは女人であるからとこれを嫌悪することが必要ではなく、男対女としての女人と共に五欲に住むことがあっても、心に菩提を目指し悲心をもって女人に接するならば、それは地獄への道ではなく菩薩の方便行のあり方であることを語る。即ち、こゝでは女人が成仏するかどうかはもはや問題ではなく、五欲に走る女を如何に導くべきか、大悲心が如何に必要であるかが執り上げられているといふ。従つて、如何にして女を導いたかの説話がくり広げられるが、こゝに菩薩の方便行の意義が見とめられる。尚、この経中には女についての幾つかの説示があるので、それを執り上げてみよう。

「樹提と女の物語」<sup>⑤</sup>

四十二億歳中、梵行を修し過失のなかつた樹提は極楽城に入り一女人に會う。女人は樹提の儀容端嚴なるをみて欲心を生じ、手をもって足をつかみ地にたおれる。何を求めるのか、の彼の間にたいして彼女は、樹提を求め、樹提と夫

婦になりたいと答う。樹提は女人に於て欲を行じないと固辞し、彼女の、若し夫婦になれないならば、今当に死ぬべし、の語を聞き、私は四十二億才の間、梵行を修し禁戒を破らずに來たので、どうして愛染の非法を受けることが出來ようかと、考えて女人から七歩を離れた。しかし、彼は七歩を離れるや女人のために哀愍の心を起し、たとい地獄に落ちるともその苦を忍ばんと、女人を死の苦から救つてやることを考え、選つて女人の右手を把り、貴女のほしいまゝにするがよい、と語つた。かくて樹提と女は十二年間夫婦となり、後に再び彼は出家し命終の後梵天に生れた。

この時の樹提は今の仏であり、女は耶輸陀羅であるとする物語であるが、仏は時に大悲心を起したが故に生死の苦を超越して悟りを開き得たものであり、このように愛欲に入るとも菩薩はそれを女人救済のための方便として行じているために、梵戒を犯したとしてもそれは犯すことにはならないとなしている。即ち、從來仏典が女人を嫌悪するのは、女人との愛欲に入るをさげんことからであり、この経は女人との愛欲を超越せんとの意欲のもとに説示されているように思われる。そして、それは大悲心のもとに方便を行ずることである。この大悲心をもつての方便行は、次の物語では更に明白である。

「瞿伽離の物語」

瞿伽離は提婆達多の弟子にして、舍利弗目連が女と姦通したと誣陥して地獄に落ちた人であるが、仏はこれに関し次の物語をする。昔、無垢と稱する比丘があり窟中に止住していた。にわか大雨が降り、女人が道中で雨にあい寒裸恐怖して窟に入った。雨晴れた后、女人と無垢とは共に窟より出でるが、これを見て五仙人が心に荒穢を生じて、無垢は不浄の行を作したと嘘言をする。無垢は五仙人の心を知り虚空に上昇するが、それを見て五仙人は過を悔いた、となすものである。仏はこれについて、無垢が方便をもって虚空に上昇したため五仙人は過を悔いて地獄に落ちるこ

とをまぬがれたのであり、舍利弗目連が方便で虚空に上れば瞿伽離は地獄に落ちなくてもよかったと語った。即ち、こゝでは過を犯す犯さないが問題ではなく、如何にして人々を過ちから救ってやるかが問題であり、方便を行ずる菩薩の行動はすべての過ちを超克する途でもありうる、となすが、更に女と接するには女を導いてやる方便行をもたねばならないことを知りうる。

「愛作菩薩の物語」<sup>⑦</sup> 愛作菩薩は舍衛城に入り乞食をなし長者の家に至った。長者の娘徳増<sup>⑧</sup>は愛作菩薩を見て愛欲心を生じ、欲によって焼かれて命終した。愛作菩薩も彼女をみてその心を知り淫欲の想をなすが、すぐにこの女人の何処を愛すべきであろうか、若し眼根を愛すべきだとすれば、眼は無常であり敗壞にして不淨肉団である等と考えて、結果欲心を離れ無生法忍を得て虚空に昇った。この愛作菩薩は欲心を起すことに依って、諸法を推求し、魔衆を破ったのであり、従つて衆生のために法輪を転じたものであるといふ。一方、徳増は命終し三十三天に生れ

#### 転于女身得成男子<sup>⑨</sup>

となつた。そして、このことについて彼女は自己の行動を回顧して、舍衛城中で長者の娘となり、愛作菩薩にたいし淫欲の心を生じ、このために命終して女身を転じ天子となり得たが、これは勝因縁に由る故であると考えた。即ち、こゝで示されるものは、愛作菩薩は徳増女の淫欲の心によつて法輪を転ずることが出来たのであり、徳増女は愛作菩薩をみておこした淫欲の心により男子となり得たのであり、共に契機は淫欲心にあることである。淫欲心は人間のもつている根本の本能であろう。その根本の本能を方便行として利用することによつて、女人救済を果さんとした素晴らしい着眼・大悲心を認めうるであろう。

即ち、これらの説話は菩薩の行ずる方便は、人間生存のぎりぎりのところにおいてなされるものであることを示す

であろう。過ちと隣り合せた大悲心は堅固な仏を目指す信念なしではなされ得ないものであり、その信念の前においては女人不成仏はさしたる問題とはなり得ないことを示すものであらうと思われる。

淨心童女会は菩提流志訳であり、仏が舍衛國祇樹給孤獨園におる時、波斯匿王の娘で年幼稚な淨信が五百の童に隨られて来つて、菩薩の正しい修行のあり方について仏に質問する。仏は彼女に八力、八種の法を成就すればよろしいと語り、その八種の法の十二種類計九十六種の法を示す。

淨心童女はこれを聞いて敬喜して仏に転女身について質問する。

世尊。成熟幾法能転女身。<sup>⑩</sup>

仏は八法を成就すれば女身を転ずることが出来ると語るが、その八法は<sup>⑪</sup>

- 1 不嫉
- 2 不慳
- 3 不詔
- 4 不瞋
- 5 実語
- 6 不悪口
- 7 捨離貪欲
- 8 離諸邪見

であるが、仏は重ねて八法を語る。<sup>⑫</sup>

- 1 尊<sub>二</sub>童<sub>一</sub>・仏<sub>二</sub>深<sub>一</sub>・樂<sub>二</sub>於<sub>一</sub>・法<sub>一</sub>
- 2 恭<sub>二</sub>敬<sub>一</sub>・供<sub>二</sub>養<sub>一</sub>・戒<sub>二</sub>忍<sub>一</sub>・多<sub>二</sub>聞<sub>一</sub>・沙<sub>二</sub>門<sub>一</sub>・婆<sub>二</sub>羅<sub>一</sub>・門<sub>一</sub>
- 3 於<sub>二</sub>夫<sub>一</sub>・男<sub>二</sub>女<sub>一</sub>・及<sub>二</sub>以<sub>一</sub>・居<sub>二</sub>家<sub>一</sub>。不<sub>レ</sub>生<sub>二</sub>愛<sub>一</sub>・著<sub>一</sub>
- 4 受<sub>二</sub>持<sub>一</sub>・禁<sub>二</sub>戒<sub>一</sub>・無<sub>レ</sub>所<sub>二</sub>欠<sub>一</sub>・犯<sub>一</sub>
- 5 於<sub>二</sub>一<sub>一</sub>・切<sub>二</sub>人<sub>一</sub>・不<sub>レ</sub>生<sub>二</sub>邪<sub>一</sub>・念<sub>一</sub>
- 6 增<sub>二</sub>上<sub>一</sub>・意<sub>二</sub>樂<sub>一</sub>・厭<sub>二</sub>離<sub>一</sub>・女<sub>二</sub>身<sub>一</sub>
- 7 住<sub>二</sub>菩<sub>一</sub>・提<sub>二</sub>心<sub>一</sub>・大<sub>二</sub>丈<sub>一</sub>・夫<sub>二</sub>法<sub>一</sub>
- 8 觀<sub>二</sub>世<sub>一</sub>・家<sub>二</sub>業<sub>一</sub>・如<sub>レ</sub>幻<sub>二</sub>如<sub>一</sub>・夢<sub>一</sub>

即ち、前者の八法は女一般について語られる道德的立場の範囲を出ないものであり、後者の八法は仏教的立場から説かれたもののように思われる。しかし、沙門婆羅門を供養し、女身を厭離し、家業を幻夢と観するを説くあたり、女人問題について早期的思想をもった不完全なものと云えるであろう。

- ① 法護訳は慧上。施護訳は智上。
- ② 大正十一、P 595<sub>c</sub>
- ③ 法護訳も五百世だが、施護訳は二百世。
- ④ 大正十一、P 596<sub>b</sub>
- ⑤ P 596<sub>c</sub>、法護訳は焰光、施護訳は光明。
- ⑥ P 596<sub>c</sub>、597<sub>a</sub>、たゞし、施護訳には貪女の記述はみられない。



しなければならぬことを示している。この自己嫌悪は自己の精神状態や行動に対するものでなく、自己の型に關するものであるだけに、それは發展性のないものであり女人に對する劣視であると云わなければならない。淨心童女会もこれと同様であろう。即ち、こゝにあるものは男女隔別、女性劣視の思想であるといひ得よう。三律儀会の、正法に適わない時は女身となすの言葉はこれを表明していよう。こゝで三律儀会をも第一の立場に加えてもよからう。

第二の種類は男女隔別の觀をなすことが間違であり、一切種法は空にして実体はないのであり、男女もすら実体はないとなし無男無女となすものである。これに属する経典は、転女身経・月上女経・妙慧童女会・無畏徳菩薩会・無垢施菩薩応弁会である。これらはすべて、声聞の人々の、女人は成仏出来ないとする説示にたいして、一切法空無男無女であると、この立場を論難しているものである。従つて、こゝでは声聞（小乗）のもつていた女人劣視の思想に堂々と相對した大乘の心意氣を認めることが出来るし、更に、変成男子のあり方はさしたる問題ではなく、声聞にたいする大乘の迫力のあらわれ方として、男子となる化相の表現はなされたと考えうるであらう。

第三は大乘方便会である。こゝでは声聞が極端にきらつた男と女の關係が執り上げられ、男女の間の淫欲を通しての菩薩行が展開されている。恐らく現実に即した煩惱即菩提の大道を示そうと苦心したものであらうが、このような段階に至つては女人不成仏の思想は風前の灯の觀を与えられる。即ち、第二、第三の立場に於けるものは、大乘の思想をもつて如何に女人の問題と相對するかの苦慮の結果であつたらう。この様な立場からみる時、法華経提婆達多品の変成男子の根底にはどんな思想があつたであらうか。

（未完）